



12 国際政治学への誘い

津田塾大学学芸学部国際関係学科

中山 俊宏 准教授

このコーナーでは、私たちの社会や生活に身近な研究テーマを分かりやすく紹介する。第一線で活躍されている研究者の研究内容を中心に、学問の仕組みや今後の可能性などについて、インタビューする。

世界は常に動いています。第二次世界大戦後しばらくは、資本主義と共産主義が緊張を続けながら、一見均衡を保っていたような時期もありましたが、1991年のソヴィエト社会主義共和国連邦の崩壊でその構図が崩れてからは、国や地域の枠組みを超えて、さまざまな問題が顕在化し始めました。テロ集団のような非国家組織が国際政治に大きな影響を与えるような時代を迎え、主に国家間に生じる諸問題を対象としてきた国際政治学も、新たな局面を迎えようとしています。

自分のことは自分で守る——

国内社会とは根本的に異なる「国際社会」のルール

国際政治学は、国際的な政治問題を扱う学問です。ただ、国際政治に関連した事柄はあまりにも広範囲にわたり、またさまざまな側面を持っているため、国際政治学の研究分野や研究内容を具体的にイメージするのは難しいのが実情です。学問としての国際政治学のわかりにくさは、「国際社会」という存在そのものの不確かさに起因しています。

この「国際社会」という言葉は、ごく普通に使われていますが、どんな存在なのでしょう。その疑問に答えるためには、国内社会との違いを明確にしておく必要があります。

日本をはじめ、統治機構が存在する国家においては、社会の構成員である個人や組織は、日常的に権力や暴力

潜在的に不安定な「国際社会」の有り様を追求し他分野の専門家と協力しながら問題解決を図る

に携わらないで生きていくことができる生活空間が保障されています。その空間の秩序を乱すような問題が生じれば、国家が権力を行使して、個人や組織に代わって秩序を回復、維持するような仕組みが備わっています。これが国内社会の在り方です。

しかし、「国際社会」はその延長で考えることはできません。「国際社会」は、国内社会における個人や組織を国家に置き換え、国際連合（以下、国連）のような超国家機関が、国内における国会や行政組織と同じように国家に対する権限を行使できる仕組みにはなっていません。国連の場合、安全保障理事会に拒否権が存在することからもわかるように、発足当初から国際社会の秩序維持組織としては十全に機能し得ないルールが埋め込まれています。国連の予算規模は、しばしば一国の外交予算にも満たないことからわかるように、国際社会で国連にできることは極めて限定されているのです。

つまり「国際社会」には、国内社会と同等な秩序はないのです。根本的なルールは、究極的には「自分のことは自分で守る」というものです。ある国家が別の国家の権益を侵害したからといって、超国家権力が仲介者となって、問題を処理してくれるわけではありません。だからこそ、国家間の紛争などの際に、状況によっては、国家という主体が、暴力に訴えて強引に問題解決を図ることが事実上許容されているのです。

また、地球上の限られた資源の分配をめぐる、熾烈な戦いが起こる可能性があります。「国際社会」とは、そういう性質を持った空間であり、それを踏まえた上で、紛争を未然に防ぐ仕組みや制度、取り決めなどを、どのように構築していけばいいのかを考え、提案するのが国

国際政治学という学問です。国際政治の世界では、国内政治とは質的に異なる社会空間を対象にしているのだという意識の転換が必要なのです。

非国家主体の台頭によって 分岐点に立つ国際政治学の世界

国際政治学の誕生については、研究者によっていろいろな見解がありますが、一般的には、異なる文明や社会を持つ国家が対面することで、本格的な摩擦が生じるようになった時期、つまり第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期と考えていいでしょう。第一次世界大戦の大惨事に直面し、こうした社会が人間の進歩の到達点と言えるのかという疑問から始まったのが国際政治学なのです。その意味で、それ以前の政治学と国際政治学は、発想の仕方が異なります。不完全な予見力と、自分の集団や組織の力を最大にしようとする傾向を持った人間が、国家という集団を形成して、何の規制もない国際社会という空間でぶつかり合ったときに、どのように対処すればいいのかを考えることが、国際政治学の原点なのです。

ところが、こうして数十年の歴史を重ねてきた国際政治学が近年、大きな岐路に立たされています。なぜなら、国際政治に影響を及ぼし得るようなアクターが、必ずしも国家だけではないという状況が発生しているからです。近年のグローバル化や、高度な科学技術の民主化あるいは拡大によって、個人や小さな集団の、国際政治の場に与える力は飛躍的に増大しています。それを象徴的に示したのが「9.11アメリカ同時多発テロ事件」です。これで世界が変わったとはいえないまでも、国際社会が変容しつつあることを如実に提示した事件でした。非国家主体が、地球上で圧倒的な軍事力を持つ超大国のアメリカを震え上がらせることができるという構図が現れたという意味で、国家を中心に考えてきた国際政治学の在り方が、今後は変化していかざるを得なくなったのです。

問題解決学としての国際政治学 柔軟性のある枠組みが特色

国際政治学の目的は、いま目の前で展開していることを「より良く理解」することであり、さらにそこで生じている問題に対して、歴史的な視点や地域の状況に対する理解の上で「何らかの処方箋を提言」することも大きな役割といえます。もともと、国家間の紛争を解決するために生まれたわけですから、問題解決学の学問である

ともいえます。従って、国際社会の諸相に関わる多くの専門家と協力しながら、共同で問題解決を進めていく色彩が強い学問でもあります。

そのため、研究テーマは多岐にわたりますが、大別すれば「歴史研究」「地域研究」「理論研究」の3領域に大別することができます。イギリスなどで顕著な「歴史研究」の領域では、歴史学や思想などと深く関わりながら文書を読み解き、外交史を展開していくような研究が代表的といえるでしょう。また、「地域研究」の領域では、国家など特定の地域を対象に、その地域における政治、経済、産業、文化などの特色を明らかにしたり、他地域との関係などを考察したりしていきます。「理論研究」の領域では、国際社会で生じる問題を、例えばゲーム理論を用いてモデル化するなど、個々の具体的な問題に適用できるような理論として構築することを目指しています。

実際の研究では、これらの領域にとらわれることなく、理論的な仮説を作って、現実に行っている特定の地域に関わる課題、例えば北朝鮮との外交交渉などに当てはめ、その整合性を検証するといったような領域横断的な研究を行う場合も少なくありません。いずれにしても、国際政治学の切り口は多彩で、柔軟性があることが特色です。経済学などと比べれば、理論的枠組みがはっきりしておらず、学問としての体系化は進んでいないため、今後も、さまざまな潮流が併存していくと考えられます。

そのため、国際政治学の学び方も大学によって差があり、その学部・学科を構成する教員の専門分野によって多様な解釈が可能です。ちなみに、本学の学芸学部国際関係学科は、地域研究を主体としており、地域を理解することから国際社会の理解へと結び

PROFILE



中山俊宏 (なかやま・としひろ)
津田塾大学学芸学部国際関係学科准教授

1967年東京生まれ。米国サウスダコタ州ウォータータウン高校を卒業し、青山学院高等部を経て、青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科に入学。2001年青山学院大学大学院国際政治経済学研究科博士課程修了。1993～94年ワシントンポスト紙極東総局記者。1996～98年日本政府国連代表専門調査員。1998～2004年日本国際問題研究所アメリカ研究センター研究員。その後、日本国際問題研究所主任研究員、ブルッキングス研究所客員研究員を経て、2006年より現職。日本国際問題研究所客員研究員も兼任。アメリカの政治・外交、国際政治を専門としており、現在、アメリカの共産党と知識人に関する本を執筆中。現実の世界で起こっている問題を分析し、国内の主要紙や言論雑誌等へ寄稿したり、テレビの報道・特集番組で解説したりするなど、メディアでの論評活動にも精力的に取り組んでいる。



つけていくことを狙ったカリキュラムになっています。

アメリカという地域に特化し 脱地域的な視点から事象を追う

私は、現在は「アメリカの政治・外交」を専門にしていますが、当初は文学や思想に興味があり、自分を含めた人間の内面を深く掘り下げたいと思っていました。しかし、さまざまな社会のネットワークの接点に存在しているのが自分であり、ネットワークの組み合わせ次第で自分はいくらかでも変わり得るということに気づきました。そこで、それ以後は自分と社会や国家との関わりを探りたいと考えるようになり、国際政治のフィールドを志すようになりました。

マスコミやシンクタンク、政府関係機関などに勤務した経験から、自分では、いわゆる学術的な研究者であるとは思っていません。研究対象は、アメリカという地域に特化していますが、地域研究者というわけでもありません。なぜならアメリカは、もともとそこに存在していた共同体をベースに設立された国家ではなく、新たな理念に基づいて人工的に設計された国家であるため、従来の地域研究的な手法を受け付けられないところがあるからです。

私の関心は、脱地域的なアメリカの政治状況の中で、個人が果たす役割や、個人と集合体の接点である社会運動や政治運動などに向いています。例えば、「キリスト教原理主義」「反知性主義」「反啓蒙主義」「ネオコン」などのように、一言で片づけられてしまうような人たちが、どのように世界を見ているのか、その世界観の彼らなりの合理性のようなものに興味があるのです。こうした集団や運動は、ステレオタイプ化されて語られることがあまりにも多いため、そうした議論で落ちてしまった部分を拾っていかなければならないと考えています。

具体的な研究では、アメリカの保守主義について、保守主義が政策としてどのようなものを掲げているかという

<写真>フィラデルフィアの独立記念館



提供：中山俊宏先生

ことよりも、保守主義は個人を中心とした草の根運動のエネルギーをどのように吸収して台頭していったのかという視点

から論旨を展開しています。個人の潜在的なエネルギーとどう共振して、保守主義が最終的にホワイトハウスまで登り詰めたのかという流れを、丁寧に追っていくのです。草の根の小さなエピソードを丹念に拾い集めながら、運動のダイナミズムを描き出すことを心がけました。

あらゆるジャンルのテキストや映像から 物事の本質の理解を目指す

ただし、こうした運動に関わる個人に焦点を当てた研究手法は、国際政治学の主流とはいえません。一般に社会運動の分析や研究は、社会学の範囲に入ります。しかし、現在の国際社会は、そうしたジャンルにとらわれず、利用できる道具はどんどん使わなければ理解できないような状況になっているのです。

この研究手法は、ある意味、評論家的であり、また芸能リポーター的ですからあります。しかし、すぐれた観察者は、一見周辺的に見えることを見逃さず、そこに本質的なものを見いだしていますし、すぐれた芸能リポーターがいるとすれば、それはすぐれた人間観察者であり、さまつなことから人間の本質を見抜く力を持っています。私は、アメリカという地域、政治学、国際政治学の接点で研究をしていますが、その中心軸は厳守した上で、目の前で起こっていることを柔軟に取り上げ、専門分野の枠を超えて考えることを、あえて自分に課しているところがあります。専門を自覚しながら、分野も手法も変化させています。そうした研究スタイルを許容してくれる幅を備えているのが国際政治学なのです。

私がこうした手法を使うようになったきっかけも、やはり「9.11」です。あの事件以降、1つの事象が、単なる同時代の事象ではなく、非常に大きな歴史的な含みを持った事象になっているような気がしているからです。そこで、目の前で起きていることを放置せず、現代の過剰ともいえる言語空間、情報空間の中で、自分も含め人々が方向感覚を見誤らないように、物事を整理して、アウトプットしていくことに力を注いでいるのです。

私の研究方法は、あらゆるジャンルの本を片っ端から読み、ネットを駆使して、世界の一流の講義、ドキュメンタリー映像などを貪欲に吸収していくことです。現在のグローバル化したインターネット環境は、こうしたアプローチを可能にしてくれますから、語学力と体力さえあれば、こうしたスタイルで国際政治学のジャンルを開拓していくことも可能なのです。